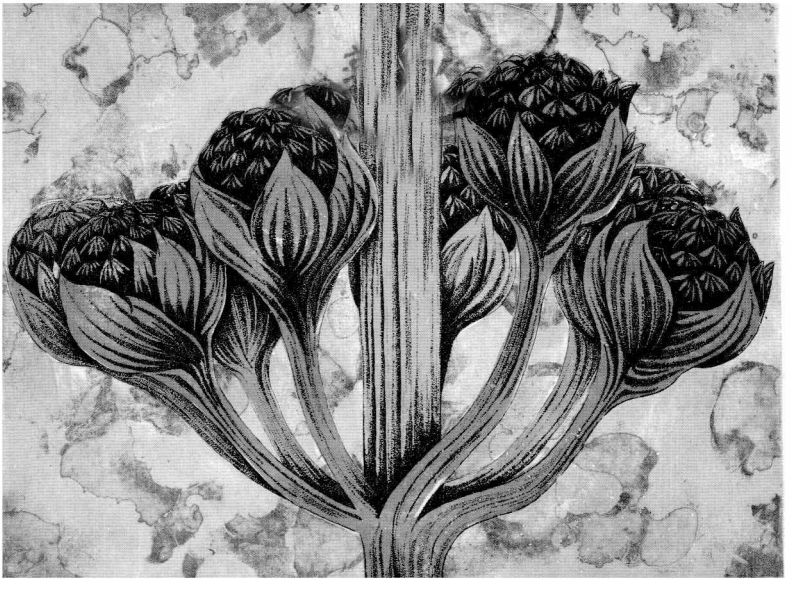
はみだし人間の系譜

杉本苑子

杉本苑子

はみだし人間の系譜

読売新聞社



著者紹介――――――すぎもと　そのこ
1925年6月26日東京生まれ。1948年文化学院文科卒業。文芸著作権保護同盟理事，日本文芸家協会評議員。1987年紫綬褒章受章。
1962年「孤愁の岸」で第48回直木賞受賞。
「穢土荘厳」（女流文学賞受賞），「滝沢馬琴」（吉川英治文学賞受賞），「鳥影の関」「散華」ほか著書多数。

はみだし人間の系譜

著　者――杉本苑子
編集人――篠原義近
発行人――杉林　昇
発行所――読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇-五五
大阪市北区野崎町八の一〇　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二
名古屋市中区栄一の一七の六　〒四六〇
印刷所――凸版印刷株式会社
製本所――大口製本印刷株式会社
第一刷――一九九一年（平成三年）八月十四日

ISBN 4-643-91064-X　C 0095
© 1991, Sonoko Sugimoto
Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

はみだし人間の系譜　目次

火事だ火事だ　7
桃ぐるい縞ぐるい　12
彼岸の茶の子　17
二人の小萬　22
神さまの正体　27
三人寄れば……　33
醜女は心の美人　39
牛ボサツ馬ボサツ　45
お医者さま二題　51
見られる女　57
鯉山の由来　62
蜘蛛のつくだ煮　67
蛍が鳴いた　72
宿を貸すぞよ　78
火事場の預かりもの　83

ヒゲ爺さまの涙 89
ハンパでない猪之助 95
ありがとさん 100
似たもの親子 105
水に魅せられた男 110
猫も顔負けだニャア 115
それぞれの死 120
トラベル虎の巻 125
歌売り渡世 131
天衣は無縫なり 136
表の顔と裏の顔 142
胃ぶくろは一つ 147
如来さまか妖怪か 153
書き直しはまっぴら 159
ヨウトホエルの末路 165
暑気払い豪勢くらべ 170
福ねずみの妙技 175
別件逮捕の島流し 180

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

茶を召しませや　185
念仏の質入れ　191
キツネのコン乱　196
市川団十郎の死　201
財テク武士道　206
蕉門の変り種　212
鬼ババものがたり　219
見よや女の心意気　224
柿の実ひとつの命　229
踊るヘンテコリン　234
先生、大いに笑う　239
木戸銭ご免の良助さん　244
人づきあいは苦手　250
かみさんパワーの爆発　255
経営合理化の神サマ　261
釜と松の木　266
坊主頭は蚊のえじき　272
集団奇行が大はやり　277

装幀　中島かほる
装画　田辺いづみ

はみだし人間の系譜

火事だ火事だ

「なんのなにがし、三十年間ブランデーを注いできた男。彼が誇りをもって注ぐのは、ヘネシー」という広告を目にするたびに、私は唸る。客の美男美女に感心したわけではない。高級なお酒を羨んだわけでもない。「なんのなにがし」なるヘッド・バーマンが、三十年間うまずたゆまず、ブランデーを注ぎつづけたというその忍耐力に脱帽するのである。

「三十年が何だ。おれなんぞ四十年間、天ぷらの揚げ通しだ」と、おっしゃる方がいるかもしれない。「じいさんの、そのまたじいさんの代から、うなぎ捕り一筋でやってきた」とおっしゃる方もいるだろう。どちらにも、私は脱帽する。

＊

私が小説を書くのは、どんなに下手でも変てこな作品でも、ともあれそれが、世界中に一つしか

ないからである。二十年三十年つづけて来られたのは、毎回ちがうものを創り出すという「変化」に、支えられていたからで、もし連日、同じ文章を「なりわい」として書きつづけなければならないとしたら、一ヵ月で私は降参するに相違ない。

ヒトという生き物には、くり返しの連鎖を断ち切って、輪の外へ飛び出したいと願う潜在的な欲望がある。だからその欲望をねじ伏せて、三十年間ブランデーを注ぎつづける男や、四十年間、天ぷらを揚げつづけるおやじさんに、畏敬のまなざしをそそぎたくなるのだ。

でも一方、ヒトは自分だけ輪の外へ飛び出すのを、本能的に恐怖し、ためらう。みんなで渡ればこわくない赤信号も、一人で無視する勇気は持てない。だから社会のルールや世間の掟を苦もなく破ったり、自分で自分の額に余され者、はみだし者のレッテルを貼って平然としている人間を見ると、これまた、畏敬の念を禁じえないのである。「えらいやっちゃ」と、なぜか大阪弁が出てくる。「とても、かなンワ」とも思う。

*

私がこの本でご紹介するのは、奇人変人のお話だが、原本には伴蒿蹊が編述した『近世畸人伝』と、八島五岳のあらわした『百家琦行伝』を主に使っている。

蒿蹊は江戸時代中期の国学者。五岳はそれより少しあとに、江戸で戯作を業とした人だった。「奇」といい「畸」といい「琦」といっても、意味はほぼ同じで「珍しい」「すぐれている」「ふう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

がわり」といった場合に、これらの文字を当てる。やはりその裏には、はみだし人間への、そこはかとない愛情と、羨望の思いが読み取れるのである。

歴史の流れをさかのぼって行くと、時代が古くなるにつれて、アウトローの影は消える。たとえば飛鳥・奈良朝あたり、大づかみに分けると、「収奪する側」と「される側」の二極しかない単純社会だから、そのどちらにも組み込まれない「世の中の余され者」など、存在しえないし、出現もしにくい。

わずかに万葉歌人の山上憶良が、「貧窮問答歌」の中で、ささやかな政治批判をこころみているけれど、この程度ではレジスタンスとも奇行ともいえない気がする。

＊

しかし、平安朝までくだってくると、さすがにやや、社会機構にゆるみが生まれ、細分化も進んで、僧とも俗ともつかぬ道心者、隠者、さすらいの歌詠みなど、はみだし人間の原型があらわれてくる。

税の重さにあえぎ、凶作に苦しんで、村を捨てた農民が、追いつめられたあげく拐しや売春、盗みなど、よからぬ群れに落ちてゆくのも、ドロップアウトの一種かもしれない。

でも、いわゆる余され者が、全国的な規模で、どッとばかり集団発生するのは、源平争乱のあと——中世に入ってからである。

彼ら「日本的はみだし人間」の系譜が、どのような形をとりながら江戸時代に伝わり、現代にまで及んでいるか。いずれ、ゆっくり見ていくことにして、とりあえず今日は、江戸版シブチン・オトーサンに登場してもらおう。

*

名はわからない。『百家琦行伝』には「芝山某」とあるだけだが、どうやらこの人、加賀邸の郭内に住む小禄の藩士だったらしい。

日ごろから武具のたぐいにはお金をかけているけれど、食事や家や着るものなどは質素をきわめ、家族にもけっして贅沢を許さない。一匹、飼っている馬にまで、原っぱで草を食べさせ、飼葉の節約を励行させるシブチンである。

妻や下僕だと値切り方が下手なので、日用品の買い物にも芝山みずから馬に乗って出かける。そして大根の束やら味噌の包みやら乾鮭やら、求めた品々を鞍の両脇にぶらさげて帰る。二本差した武士にはあるまじき光景なので、往来の者はクスクス笑う。芝山某は意に介さない。

彼の家の門は、粗末な板屋根を乗せた冠木門で、片方は柱に、片方は榎に打ちつけてあったから、木が成長するにつれて屋根は少しずつかたむき、とうとう門ぜんたいが曲がってしまった。妻子らは当然、ぶつくさ言い出す。

「みっともないわパパ。このさい思い切って家も門も、すっかり建て替えましょうよ」

どなりつけると思いのほか、芝山は承知し、貯えの小判を持ち出してきて、まず設計図を描いた。そしてその上に、

「ええと、玄関に五両、居間と客間に十五両、台所に三両、湯殿に二両……」

つぶやきながら小判を置き並べ、しばらくじっと眺めたあと、いきなり、

「大変だッ、火事だ火事だッ」

さけびざま小判を設計図に押し包み、ふところに捻じ込んで、寝間へ走った。ふとんを引っかぶって寝てしまったのである。

芝山家の家族らは、オトーサンの心根のいじらしさに打たれ、新築計画を撤回したと『琦行伝』にはあるけれど、さて、今の女房族はこれくらいの奇策で、マイホームの夢をあきらめるだろうか。泰平のまっただ中、治にいて乱を忘れず、生活を切りつめてまで武具をととのえるのは、当時といえども奇行だが、人々はその奇行の中に、芝山某の節操を見た。侍としての志を看取した。奇は、したがって美にも通じたのだ。でも、家庭第一主義の現代では、彼は奇人にすら価すまい。愚人とあざけられるのがオチだろう。

桃ぐるい縞ぐるい

「人間には、毎日のくり返しをたち切って、自分をしばる鎖の外へ飛び出してしまいたいと願う潜在的な欲望がある」

そう前に、私は書いた。つまり言えば奇人願望だが、そのくせ人間は、

「自分だけ一人で、輪の外へ出て行く勇気がなかなか持てない」

とも書いた。社会の掟やルールを無視し、平然とドロップアウトしてのける人を、「えらいやっちゃ」と褒めもしたけれど、もしかしたらこの手の奇人は、勇者であると同時に、嗜虐の快感をひそかに楽しむマソ資質の持ち主かもしれない。

＊

外山成山と称する人物がいた。武士なのか学者なのか、もしくは何か他の職業についていた人

か、『百家琦行伝』には一行も記述されていない。ただ、丹後の国の産で、三十歳のとき江戸へ出て来、麻布の二本榎に住んだ、そして五十歳のとき隠居し、相州神奈川の生麦へ引き移った、どだけ書いてある。

このミスター成山が、筋金入りの変り者であった。「桃ぐるい」といってよいほどの桃好きなのだ。もっとも童名を、桃太郎と呼ばれてはいた。小さいときから桃が好きなので、桃太郎と名がついたのか、名前が桃太郎だったため自然と桃好きになったのか、ニワトリが先か玉子が先か、そのへんの因果関係はわからない。

ともあれ、桃ぐるいの結果、大の男が衣服をすべて桃色に統一してしまったというのだから、並の入れこみ方ではない。どこへ行くにもオール・ピンクで決めるので、妻が閉口して、

「おねがいですから、やめてください」

諫止しても聞く耳持たない。なにしろ時は、江戸後期……。娘が二十すぎて白歯でいただけで、化物扱いし、袖丈が一寸長いの、短いのといった些事に、目くじら立てる時代だから、しかつめらしいオジサンが桃色ずくめで歩いたらどうなるか。

当然、だれもがひっくり返って笑うけれど、成山は平気の平左で外出する。むろん着るものだけではない。家のまわりには紅白の桃の木をぎっしり植えならべ、花どきの美しさはたとえようがない。

それでもあきたらないのか、成山はとうとうある年、

「伏見の桃山は名の通り、桃の名所と聞いた。見物に行ってくる」

と言い出した。上野、飛鳥山、あるいは吉野、醍醐など桜の名所へ花見に行くなら話がわかるが、わざわざ伏見まで桃見物に出かける酔興はあるまい。妻がまた、躍起になって止めたのに、桃ぐるいの夫は振り切って出かけてしまった。

庭に数百本も植えた桃の木だから、実の成る数もおびただしい。連日連夜、成山はむさぼり啖う。飽きる気配がまったくない。種は桃仁といって、漢方の薬である。買い取る薬屋はきまっていて、毎年、一石にもおよぶ桃仁を引き取ってゆく。

*

成山は別号を桃花庵、蓁々居、蓁堂、仙源などとも称している。すべて桃の故事にちなんだ号だし、桃の実を盛る鉢をはじめ、食器から飯櫃、火鉢まで、いっさいがっさい桃の実型に作らせてある。

壁は桃色に塗り、障子紙も腰張りも、すべて桃色……。床の間には桃にちなんだ西王母の軸をかけ、衝立に描かせたのは劉備、関羽、張飛の三傑が桃園に義をむすぶ図柄である。

火事見舞いのいでたちが、また、ものすごい。古道具屋で見つけた桃形の兜をかぶって駆けつけるのだ。出火さわぎにまして、人々は成山のこの恰好に肝をつぶしたことだろう。

彼には著述がある。古今東西、およそ桃にかかわる漢詩、和歌、俳句、物語、ことわざなど、手

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com